

# 「ハマスの息子」が記者会見 イスラム世界の現実を伝える

パレスチナのイスラム原理主義組織「ハマス」の創設者シエイク・ハッサン・ユージェフの長男として生まれたモサブ・ハッサン・ユージェフ氏(34)。イスラエルで自爆テロが頻発した2000年前後、ハマス内部にしながらイスラエルの諜報機関シン・ベトに協力して多くのテロを防ぎ、さらにはイスラム教徒からイエス・キリストを信じる者になるという極めて特殊な経歴を持つ。その経緯を記した自伝『ハマスの息子』(邦訳は幻冬舎から)は世界のベストセラーとなっている。今年6月14日、そのユージェフ氏が、2007年にアメリカへ亡命して以来初めてとなるイスラエルへの一時帰国を果たした。なぜ今帰ってきたのか。そのメッセージは何か。記者会見での彼の発言を紹介する。(エルサレム 石堂ゆみ)

## 大きく変化した表情

記者会見場に入ってきたユージェフ氏は、すっかりしたたけつきながら意外に小柄だった。きちんとしたスーツに身を包み、ヨルダン川西岸地区で諜報活動をしていた時とは全く違う印象になっていた。驚きは、その表情だった。2007年にアメリカへ亡命したと

きとは別人かと思うほど、穏やかで真つ直ぐな笑顔になっていた。厳しい話になると、時々、ハマスの顔に戻るのだが、計算のない理路整然とした回答からは、彼が真実を語っているという印象を受けた。記者会見には、イスラエル諜報機関シン・ベトの元同僚イツハク・ゴネン氏と、イスラエル人(ユダヤ人)でハリ

ウッドの映画監督サム・フューエル氏を同伴していた。———という経緯でイスラエルに協力するようになったのか。ユージェフ 私の最初の疑問は、「もしハマスの目指していることが実現したらどうなるのか?」ということだった。もしハマスが西岸地区を制圧し



エルサレムでの記者会見の様子

たら? もし今、イスラエルが消えてハマスがすべてを支配するようになったら? 答えは明確だった。ハマスは、ガザでパレスチナ人を20階から生きたまま突き落とすような団体だ。それがハマスの文化だ。それがイスラムの文化なのだ。私は人として、この事実を無視できなかった。同胞を裏切

ったことで「選択を誤った」と言われたとしても、人の命を救うことが間違いだということがあり得るだろうか(あり得ない)、と思った。それでイスラエルの治安組織に協力したのだが、私はそのために、自分の文化、アイデンティティ、それらすべてを犠牲にしなければならなかった。しかし私は、自分のしてきたことに誇りをもっている。もし、また同じ事をするように言われるなら、そして私にその力があるなら、私は喜んで同じことをするだろう。———あなたはイスラエルの人々の命を助けたと言うが、イスラエル兵に殺されているパレスチナ人についてはどう思





イエスに救われた喜びに輝くユーセフ氏

# 「私はイエス・キリストを信じている。」

らせることができるのか。それは、その創始者で預言者であるムハンマドと彼の歩みを明らかにすることだと思っ

た。ここエルサレムで、あの神殿の丘のすぐそばで発表させていただく。

世界には大きな影響を及ぼした指導者たちの映画がたくさんある。しかしただ一人だけ、だれも触れることのできない、だれも彼をカメラに納めることのできない、絵に描くことすら許されない指導者がいる。それがムハンマドだ。私たちは今、映画「ムハンマド」のために働いている。そのことを今日、

編注映画「ムハンマド」では、イスラムの預言者ムハンマドの顔（俳優の顔）をはっきりスクリーンに映し出すことになるという。これはイスラムの世界ではまったくのタブーとされていることだ。風刺画などでムハンマドの顔を描いただけで死刑を通告された者もいる。ユーセフ氏は、「イスラムを侮辱しようとしているのではない。ちょうど映画『パッション』のように、イスラムの文献に正確に、誠実にムハンマドの生涯を映画にするのだ」との方針を語った。まさに「無謀」とも言えるチャレンジだが、ユーセフ氏に恐れというものは全く感じられなかった。

ラムを侮辱しようとしているのではない。ちょうど映画『パッション』のように、イスラムの文献に正確に、誠実にムハンマドの生涯を映画にするのだ」との方針を語った。まさに「無謀」とも言えるチャレンジだが、ユーセフ氏に恐れというものは全く感じられなかった。

ラムだけではない。人を束縛する宗教はどれも同じだ。私が明らかにしたいのは、宗教による支配全般だ。キリスト教であれイスラム教であれ、またユダヤ教であれ、人を支配する宗教に対しては、新しい世代に立ち上がってもらいたいと思う。しかし、私自身がイスラム出身なので、イスラムに対して批判する権利があると思っ

ところ、今世界は「アラブの春」だと言っている。（編注：エジプトに始まった民主化デモ。2011年から中東で広がり、独裁だったエジプトやリビアの政権転覆につながった。）世界はこれを良いものだと考えているが、私はそうは思わない。かつてヨーロッパでも、キリスト教会の支配に対して立ち上がった革命があった。しかし今アラブ世界で起こっていることは、その逆だ。アラブの春では、「政権」に対して立ち上がったのであって、その結果は、イスラムという人を支配する「宗教」を持ち込んだ形になっている。イスラムの最も大きな課題は、宗教と国家の境目が無いということだ。イスラムにおいては、すべての上に立つ最高権威は「アラー」。だから、国家と宗教が分離しない限り、宗教的圧迫という暗闇がずっと続くことになる。

——あなた自身の信仰について語ってください。

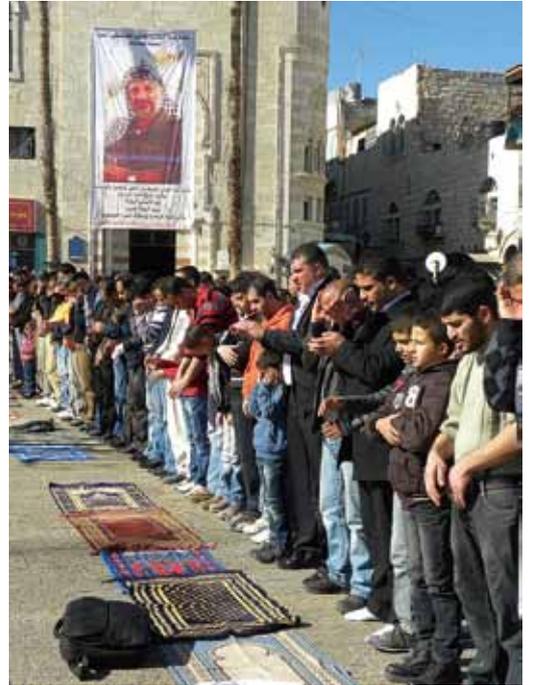
ユーセフ 私はここで宗教的な目的を達しようとしているとは見られたくない。私自身宗教的な者ではないからだ。私はイエス・キリストを信じている。私はその核心である、罪の赦し、無条件の愛、キリストが世界にもたらした恵みを信じている。キリストがい

なければ、私は今ここに立つことはなかった。

## イスラエルについて

——もし「シオニスト」がいなくなれば平和になると思うか。

**ユーセフ** シオニストとは、この土地に所属している人々（ユダヤ人）を、ここへ連れ戻そうとしている組織のことだ。これがアラブ人には大問題になる。しかし、ユダヤ人は土地を購入したのであって、銃をもってこの土地を奪ったのではなかった。もしアラブ人が、ユダヤ人とイスラエルの歴史、またユダヤ人がこの土地に対して持っている権利など、基礎的なことだけでも子供たちに教えるようになれば、ここにいつかは平和が来るのかも



祈りを捧げるイスラム教徒たち

しれない。

——ハマスとイスラエルは和解することができると思うか。

**ユーセフ** ハマスがイスラエルの滅亡を願っている限り、イスラエルとハマスの和平が実現することは無い。私は、ハマスとイスラエルの戦いは、政治

的なものではないと信じている。それはイデオロギーの戦いだ。イスラエルは、民主主義と個人の自由、憲法の権威など、西側文明社会を代弁している。一方、ハマスが目指しているのは、宗教（アラー）による完全な支配だ。だからこそ今、アラーとはどんな神なの

か、その預言者ムハンマドとはどんな人物なのかを明らかにする必要がある。

もちろんこれは大変危険なことだということは分かっている。私があまりにも対立的なので、多くの人が私を困惑の目で見ていることも分かっている。ここで愛と平和を語った方がきっとヒーローになれただろう。しかし今、本当のことを明らかにし、闇にいる人たちを解放することが必要だと私は確信している。もしこの地域の人々が互いにもっと理解し合うことができたなら、それが平和への道になる。

**ユーセフ氏**は、こうしたイスラムに対する大胆な告発的発言をしているため、身の危険があるのではないかと

問も相次いだ。ユーセフ氏からは、それについての具体的な回答はなかった。逆に、自分は今全く恐れていないと言い、その態度にも微塵も恐れが現れていなかった。

今、彼は家族から勘当され、異国アメリカの地で孤独に生活している。しかも彼が挑戦しているのは、イスラムという途方もなく大きな相手だ。彼は記者たちの前では「イデオロギーの戦い」と表現していたが、これが「霊的な戦い」であることは間違いない。彼のことを本当に理解し、支えているのは、主イエスご自身だけかもしれない。それでもユーセフ氏は、彼がなすべきこと、また彼にしかできない使命を心から確信し、さらに前進し続けようとしている。